

2 度目のブラジル

国際食料情報学部 国際バイオビジネス学科 3年 41814108 番 竹中 奏絵

1、当初の目的

今回の短期留学に向けて私は大きく三つの目的があった。一つ目はブラジルという国について学ぶことである。ブラジルへは 2 回目の渡航となり、前回とは活動する州が全く異なっているためより普段の生活、文化、人柄などを知り、それぞれの地域を比べることが出来ると思った。二つ目はアグロフォレストリーについて学ぶことである。昨年ブラジルに行くにあたってトメアスーについての学習をしたが、現地に行くことはできなかった。特有の農業のやり方であるアグロフォレストリーはブラジル国内のどこでも見ることが出来るものではないし、トメアスーの地域は日本人移住の歴史を持つ場所である。三つ目は長期留学に繋げるものにする事である。このプログラムの中に農大との提携校であるサンパウロ大学とアマゾン大学との両校への訪問が含まれており、どのようなキャンパスで学生が生活し、学んでいるのかを実際に見ることで今後留学に向けてのモチベーションにつながると考えた。

2、現地で活動した内容

2-1、8月29日～9月3日サンパウロ大学 ESALQ

ここでは ESALQ の研究施設の視察、ESALQ の先生による様々な授業、ポルトガル語の授業、学生との交流を行った。まず驚いたことはキャンパスの広さはもちろん、施設の充実である。大学内の施設をいくつも訪問したが特に印象強く残っているのが Casa do Productor Rural、Esalq-Log、CEPEA である。

Casa do Productor Rural は大学の知識を簡単に農家に伝えるという、研究・普及を行っている組織である。大学の支援の下、教授や学生、政府の技術者が実践的に活動している。活動範囲としてはブラジル全土に加え海外も相手にしており、農家からの相談に答えたり、見本作物を育て講習会をするなど支援をしている。

Esalq-Log は経済の研究組織であり、農業関連市場の傾向や貨物の診断を行っている。週ごとでブラジルの輸送コストについて 5000 もの情報を電話で集めており、物の価格をはじめ、倉庫の値段、1tあたりのストック日数における価格など様々な方向から分析し、市場の動きを予測するために使っている。

CEPEA は USP に所属しているが企業の支援で運営している組織である。ここではいくつかランダムに選んだ農家から実際にかかっている生産コストを調べ平均値を出し、国際価格や天気などを考慮し、そこから 29 の市場の取引価格を決めている。この取引価格が基準となるため毎日変化を記録し、実際に農家を訪問したり、集めたデータを分析したもの

を文書にするまで行っている。

この三つの組織が行っているようなことは日本だったら学生が関わることは難しい。しかし、これら組織はインターンとして USP 以外の大学からや希望する学生を受け入れ、プロジェクトに関わらせている。行っている内容は日本の団体にも似ているものもあるが、学内にいながら大学で学んだ知識のアウトプットができることが学生の経験にとって、学ぶ環境としてとても魅力的だと感じた。このことから今まで気づかなかったが日本では学生と社会の隔たりが厚いのだということも学んだ。このサンパウロ大学は半年から一年インターンに行くことが卒業するにあたって必要である。大学内や企業でのインターンの期間が長いということは自分の進路をよく考えることが出来る。実際半年や一年のインターンからそのまま就職する学生や合わないと思い他の仕事を探す学生がいるという。3日から1週間ほどで終わる日本のインターンとの違いに驚いた。このような制度を日本にも取り入れてほしいと思う。

現地学生との交流は主に世界展開力事業の篠原先生による説明で集まった学生と取ることが出来た。世界展開力事業の説明で集まった学生が予想していたより多く、日本に興味のある学生とは英語やポルトガル語、日本語での交流が出来、普段の生活について聞くことやポルトガル語を学べ、有意義なものであった。ここだけの交流で終わらないようにこのつながりを今後も続けたい。



ESALQ で行われている水耕栽培



芽接ぎの様子

2-2、9月5日～12日 トメアスーでの活動

初めて訪れるブラジル北部は思っていたよりは過ごしやすかった。サンパウロから 3000 キロの移動をしてきただけあり、食べ物や顔つき、町の雰囲気などに違いがあり、改めて国の広大さを感じた。私がトメアスーにきて驚いたことは日系の出会った方々が日本語を話し、日本にも研修で行ったことがある、レストランのメニューに焼きそばやラーメンなどが普通に書いてありブラジル人でも食べており、日本文化が根付いていたことである。ブラジ

ルで暮らしている分には日本語や文化を伝えていなくても生活には困らないが、移住してきた人がしっかり残してきた証だと思った。今でも日系を大切にしている人がいてこのトメアスーという町が成り立っていた。移住の歴史にもこの地域の成り立ちにも関わる CAMTA とトメアスー文化農業振興会を訪問し、ホームステイ、日系の方々の農場視察をした。

この地域の農産物を買っている CAMTA はトメアスーの農業組合である。この地域は港のあるベレンから遠く、収穫した作物をそのまま運んでいっては痛んで売れないものが必然的に出てくる。その問題を解決するためにここには 1987 年に JICA がジュース工場を建てた。加工して保存しておくため運搬にとっても役に立っている。現在は元の工場より加工・保存の許容量を増やしており、14 種の加工と 4000t まで冷蔵が出来るようになっている。取引先が国内だけでなく、日本やアメリカ、ドイツなど海外にもあるため品質の基準がとても厳しく、基準に満たない場合は引き取らない。そのためブラジル政府がこの基準を使うこともあるという。

トメアスー文化農業振興会では日本の文化を伝え、地域活性化している。会員を募り会費を集め、多方向とのプロジェクトを行って運営している。最初の移住から考えると長い月日が経っており、2 世・3 世へと移り変わっている。この地域に住んでいる日系人は減っていき、ブラジル人が増えていく中でこの文化農業振興会を続けていくことが困難になってきている現状を知った。この地域で広がり始めているアグロフォレストリーのことや CAMTA のことを含めてもトメアスーの歴史の中で日本人は重要な存在であるが、続けることの難しさを感じた。私はトメアスーに行く前は移住の歴史中心に、当時移住してどのような生活だったのか、移住に至る経緯など過去のことを考えていた。行って気づいたことは移住の歴史は日系として今も続いており、現在までをみることでこの地域についてより知ることが出来るのだと学んだ。

私がホームステイさせていただいたのは乙幡正三さんのところである。現在農場は息子の忠幸さんが継いでおり、三代目である。農業についても続けるということは難しい。そんな中でこの農場が 80 年以上続いていることはすごいことである。ここではアサイーとカカオの混植やドラゴンフルーツ、コショウ、クプアスなど様々なものを育てている。主な出荷先は CAMTA だが、それ以外にもベレンに出荷するもの、CAMTA 以外への出荷も行っている。農場に泥棒が入ることはよくあるようで、農場を視察しているときも勝手にとられたために落ちてしまったアサイーの房を見た。この地域ではアサイーはよく食べられるため、町を見ているとアサイーと書かれた看板が多くあり、アサイーの買取を行っている。買い取ってくれる場所が多くあることで盗んだ作物でも売り先に困らないのだと思った。3 泊 4 日で生活をしてブラジルにいるということを忘れることがあるくらい日本式的生活スタイルでブラジルにいてもお茶や味噌汁を飲んだり、ご飯が日本米だったりという生活が出来ることに驚いた。また誕生日会にも一緒に参加させてもらい、大きな会場で日本の披露宴のように行われ、ブラジルならではの文化を体験した。

アグロフォレストリーでは坂口さんの農場視察が一番印象に残った。アグロフォレスト

リーというには最低3種の混植からと聞いたが、坂口さんの農場は本当に森のようだった。350haに7人の従業員を雇っている。畑は必要な肥料を入れる程度で基本的にはほっとくようにしており、多くの作物が植えられていることで病害虫の心配がなく、木々が生い茂り地面に日陰を作ることで雑草も生えにくくなっていた。トメアスーにいる間、他の方の農場も視察したがこの農場は別格だと感じた。私が最初に想像していたアグロフォレストリーそのもので、そこに坂口さんは加工も加えCAMTAに出すような工夫もしていた。収穫が機械で行えないこと手間だが、生産に手をかけなくてもいい分、収穫や加工に時間を使うことが出来ていると思った。多くの種類があることで収穫時期に違いがあり、年間を通して収入が得られる、5年10年後を見据えた農業であった。熱帯地域だからこそ一年中作物が出来、作物のサイクルも速い。ここでのアグロフォレストリーは最初に経済基盤を整えることにある。常に収穫が出来、永年残るように30年でひとサイクルぐらいを目指している。環境に良いということは後付けであり、環境に良い理由だけではこの農業は続かない。アグロフォレストリーという名前だけでなくこの仕組みを表したSAFTAというトメアスーの農業を実際に見て、新しい農業の形を学んだ。災害が多く、温帯気候の日本では九州や沖縄のほうでないとこのような農業はやりにくいがある土地で農業をするという点では生かせるところを今後探したいと考えた。



坂口さんの農場



加工場

3、今後の取り組み

短期留学を終えてこれから取り組みたいと考えたことはブラジルで学びたいことを明確にすることである。今回のプログラムで実際に行って学んだことは多くあるが現地でサンパウロでは松崎さん、トメアスーでは木島さんの今長期留学に行っている先輩の話が聞いたことは運が良かったと思った。4ヶ月過ごしての話やブラジルで何をしているのか、どうして来ようと思ったのかなど聞き、長期留学に行きたい気持ちが高まるのと同時に今の私には一年留学するとしてのビジョンが弱いと思った。ただ行きたいから行くのではなく、帰国したときにそこから持ち帰るものを今私が学んでいる分野と絡めて突き詰めていきたい。

そのために知識を増やすことも大事だが振り返りを行い、方向性を定めることが必要である。